

# もしかしてカサンドラ？

## アスペルガーのパートナーを持った女性たちの苦悩

フリーライター  
水口 青

●みずぐち・せい 1960年神奈川県生まれ。フェリス女学院大学文学部卒業。

アスペルガーは、一九九〇年代から世界的に認知されるようになった。自閉症の一種ともいわれ、ときに卓越した才能につながるケースもあるが、周囲に深刻な影響を与えることもある。たとえば、アスペルガー男性のパートナーとなった女性への影響だ。コミュニケーションがうまくいかないこと、それを周囲に理解されないことなどから起きる女性たちの不調。彼女たちが陥った状態は、いまカサンドラ症候群と呼ばれる。

三十代後半のころ、一片の紙切れが手放せなかった。女性誌巻末の星占いに「旅立つ貴女の決断は正しい」と、占いには珍しく言い切った表現を見つけ、切り抜

まりだが、星占いの紙切れは、あと一步を踏み出す、そんなエールに相当した。

### 水まんじゅうの中

もう一人、思い出す男性がいる。ある広告代理店の社長。部下が関わった完成間近の仕事に口出しし、かき回して収拾のつかない状態にしてしまう。四百字足らずの文章を読み通すことができない。机はゴミの山、パソコンに給与明細を表示したまま外出する。

『サライ』の編集長は昔の部下

「どんな芸能人でもイベントに呼べる」

本人が信じて話す言葉には、荒唐無稽な内容も真実と思わせる説得力があり、無駄な混乱を招いた。夢みたい企画は実現したためしかなかった。何人ものスタッフが同じセリフを残して退社した。

「やっつけられません」

悪い人でも意地悪でもない。むしろ穏やかで親切で、社会的な地位もあり頭もいいのに、どこかが確かにズレている。

夫も社長も会話のやり取りが長く続かず、自分が

いてお守りのように持ち歩いていた。

結婚十一年目、ひそかに離婚を決意していた。どんな言葉も尽くし態度を工夫しても、夫とはコミュニケーションが成り立たない。会話は上滑りし、何を考えているのかわからない。彼は紳士的で物静かな人だったので、周囲に不安を訴えても「贅沢な悩みだよ」と一蹴された。寂しいだけだったら夫婦が続けられたかもしれないが、一人我慢が限界のある日、夫が暮らしを脅かす額の借金をして遊興費にあてていたことが判明、事態が動き出す。

お笑い芸人にバンジージャンプを強い、うるたえる様子を面白がるテレビ番組がある。最後は応援の声を受け、迷いを振り切るように空中に飛び出すのがお決

め水まんじゅうの中にいるような感じがした。身にまとわりつく白いモヤモヤ、相手の姿は見えないの手に伸ばしても届かない、わかり合えない……もしかしてこれが大人のアスペルガー症候群？

アスペルガーは男性に多いといわれている。元夫たちが大人のアスペルガー症候群だとすると、水まんじゅうの違和感に納得がいった。また、アスペルガーをパートナーを持つ人（女性に多い）に精神的・身体的苦痛が生じる症状にも「カサンドラ症候群」という名前がついていた。

カサンドラの語源はギリシャ神話に登場する王女。神の愛を拒んだことで、「話す言葉を誰も信じない」という魔法をかけられる。アスペルガーの人は世間的には問題なく見えるため、妻が夫への不満を口にしても人から信じてもらえない。その状態が呪われた姫と似ていることから命名された。

つまり意思の疎通が成り立たない元夫はアスペルガー、水まんじゅうのような不安を誰にもわかってもらえない私はカサンドラだったことになる。

「カサンドラ」というキーワードでネット検索し、ヒットしたブログを片端からのぞいてみたところ、「実